



人類学

令和6年6月27日

黒田 毅

歴史という人類の歩みは、今日の世界へ至るものである。過去を顧みたとき、戦争が支配し、戦争は生存という原理における過去の法における現実であると理解できる。また今日において、人類の理性は、人道主義という共有の判断を有するものである。

戦争と競争が進歩を生んだという理解は、生存という法における理解である。これらは生存という絶対性は今日においても必ず存在するのである。

しかし今日知性は新たな未来と世界を模索するものである。過去への考察は、知性における優位性が世界を行ったことを理解できるものである。

これらは生存要求と知性が、今日未来という選択へ対峙していると考えられるのである。

人類の進歩は知性の進歩である。また戦争と競争はその必要性においてこれを与えたという現実に疑いを得るものはないのである。

しかしこれらへの疑問は、生存要求と競争と戦争という現実を基盤としたものであるから、これらを排除したとき、人々がどのような自己を与えられるかを考察しなくてはならない。

そのときこれら進歩が必ずしも進歩でないことは理解できるはずである。

これらは霊長としての人間が、正しい自己の進歩軸を得る必要性を提案するものである。

これら偉大な考察は、すべての現実への正しい疑問であると考えられる。進歩はその本来人類が有するその美德の拡大であるならば、自己の利益を追求する現実は否定されるのである。

これら人類学という提案は、過去の解明と未来の創造を提案するものである。

人類は、動物本能と知性と理性における創造を有する。これらは欲望と理性という2つの現実を有することなのである。



これらは理性の進歩は社会進歩を与えるものであり、知性はこれに等しく自己を与えるものである。

一切の歴史において、文明の進歩への正しい考察であると考ええる。

欲望は理性に挑戦し、理性は欲望の克服を求める。これら文明の対立は、進歩という現実において未来という現実を行うのである。

知性はその学問を与え、学問は文明を創造する。しかし理性の進歩を得ない限り、それを有することがないのである。

人類の歴史が恐れとの戦いであるならば、必ず勝者が存在するのである。また敗者も存在するのである。

エジプトの叡智は、その文明を与え、今日それを受け継ぐものはいない。しかしそれを凌駕する文明は今日存在するかは明らかな疑問なのである。

これら忘れ去られた記憶は、未来を模索することは存在するものである。また、進歩は必ず存在する。しかしそれとともにすることは、それに参加することなのである。

時間は必ず未来へ進むのである。その頂は、常に勝者が有するのである。

人類は、生存における必要性へ自己と思索を経て、その文明を得た。今日の技術文明は、それである。

自己への考察は、古代、中性西洋における現実であり、今日の近代学問を形成するものである。東洋における宗教的な探究は、その理論化を有さず、それらを受け継ぐものは少ない。

人類史における現実は、戦争という過去であることは疑いをえない。そこには勝利がこれら歴史の永続を与えているのである。

歴史は決して過去に進まない。未来へ進むのである、過去が全てを有するならば、すべての理解と知識を過去に求めることができるのである。

進歩は必ず受け継がれ、すべての歴史を受け継ぐのである。